

松岡光治編訳

『ヴィクトリア朝幽霊物語』

東京：アティーナ・プレス、2013年、800円、334頁

江澤美月

本書は松岡氏の長年の翻訳の成果が一冊となって結実したものである。この中には1850年代の作品が三篇、1860年代の作品が二篇、1870年代の作品が二篇、1890年代の作品が一篇、計八篇の短篇が収められているが、作品の配列は年代順ではなく、編者の編集によるものである。また、全篇八篇のうち、六篇が本邦初訳である。

ヴィクトリア朝の幽霊物語を提示するにあたり、本書が注目しているのは、実体験との近さである。松岡氏は「あとがき」でヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) が1918年「小説の超自然現象」(“The Supernatural in Fiction”)で行った指摘「私たちが幽霊物語を好むのは、それが怖い思いをする楽しさへの人間の不可思議な願望と大いに関係しているからだ」に依拠し、「幽霊物語とは、そもそも、自分には累が及ばないという安心感があっても、ひょっとすると及ぶかもしれないと想像することから生まれる」と、恐怖の擬似体験願望から生まれる娯楽性に注目している(325)。また最高の幽霊物語の定義として、マイケル・コックス (Michael Cox) とロバート・ギルバート (R.A. Gilbert) が『英国幽霊物語』(The Oxford book of English ghost stories, 1986)で行った定義「ぞっとするほどの過剰な流血や退廃によってではなく、謎めいた悪の力を暗示するような名状しがたい雰囲気によって、幽霊の恐ろしさを読者に印象づける」が、自身のHPで公開している28篇の幽霊物語からの、一つの選択基準であったことを示している(334)。このような日常から乖離していない幽霊の存在可能性を支えた時代背景として、松岡氏は、科学技術の発展にも関わらず厳然として存在した死への不安や恐怖、および早世した死者との交信願望(329-330)を、考慮に入れている。以上、作品全般に通底する特徴を踏まえた上で、収録順に各短篇を概観したい。

## 1. イーディス・ネズビット (Edith Nesbit, 1858-1924)

「約束を守った花婿」 (“John Charrington’s Marriage,” 1891)

本書の冒頭を飾るのは、妖精と人間の交流を描いた「エヴリデイ・マジック」の旗手ネズビットの作品である。読者にとってこの幽霊物語が、荒唐無稽な話ではなく、実体験に近いものと映る第一の理由は、作品の舞台がゴシック小説に見られるような異空間ではなく、同時代のイギリス南西部の村に設定されているからである。第二の理由として挙げられるのは、既存の物語枠を用いていることである。この作品は、契りを交わした恋人が、亡霊となって帰還するバラッド「魔性の恋人」 (“The Daemon Lover”) の系譜に属するが、松岡氏の題名はそのことを示唆している。原作のバラッドで、長い不在の後、突然現れた恋人(男)の亡霊は、恋人(女)を航海へと誘い出し、海に沈めてしまう。同様に、この作品で結婚式当日に、外出先で不慮の死を遂げたジョン・チャリングトン(John Charrington)は、必ず帰って結婚するとの約束通り、亡霊となって式場に姿を現し、結果として花嫁メイ・フォースター(Mary Foster)の命を奪う。このように男が女を破滅させる誘惑物語の要素がある一方で、「約束を守った花婿」の女には、男を誘惑し破滅させるファム・ファタル的な傾向もまた見られる。メイには、かつてジョンの熱烈な求愛を二度にわたり拒絶した過去があり、そのメイから婚約を勝ち取ったジョンは、彼女との結婚を目前にして事故死するからである。ヘザー・ブラウン(Heather Braun)は『英国文学におけるファム・ファタルの興隆、1790 - 1910』(*The Rise and Fall of the Femme Fatale in British Literature, 1790-1910*, 2012)において、ヴィクトリア朝中期のファム・ファタルは、罰せられる傾向にあることを指摘しているが(9)、ジョンの後を追うようにして死ぬメイには、この後本短篇集で繰り返し取り上げられる、遺された者の死者に対する悔悟の念が、先行的に示されている。

## 2. チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70)

「殺人裁判」 (“To Be Taken with a Grain of Salt,” 1865)

上述したネズビットの話で、亡霊となって現れるジョンの死因は、殺人であることが示唆されているが(15)、ディケンズのこの話でも幽霊は、殺人の被害者である。被害者の亡霊が陪審に働きかけた結果、容疑をかけられた被告人は有罪と

なり、被害者による加害者への復讐は完遂する。松岡氏はこの話の背景として、ディケンズの晩年であるこの頃、殺人事件が相次いで起こったことを、訳註で指摘しているが(42)、弱者の主張を貫徹させるために出現したこの話の幽霊は、陪審の判断に対する不信感を、具現化させたものであろう。

### 3. ダイナ・マロック (Dinah Mulock, 1826-87)

「窓をたたく音」 (“The Last House in C-Street,” 1856)

二篇殺人の被害者としての幽霊の話が提示された後で、第三番目に提示されるマロックの短篇では、より日常に近く、実家で出産により死亡した女が、離れている夫と娘のもとに、亡霊となって現れている。作品中言及される『ハムレット』では、亡父の霊が息子の許に出現するが、マロックの作品ではこれとは対照的に、母親の亡霊が遺された娘のもとに現れている。松岡氏は作者紹介で、マロックが「亡妻の姉妹に関する条例」(1835)や「既婚女性の財産に関する条例」(1848)に関する作品を残したことに触れているが(76)、「窓をたたく音」に描かれた夫は、家父長制の時代においても、妻や娘の主張を優先させている。彼は体調不良のため旅先での滞在を切り上げて帰郷を望む妻と、恋人との別れを惜しみ予定通りの滞在を望む娘、の双方の主張を受け容れ、先に帰郷する妻には、容態の急変時には直ちに連絡することを約束させ、娘には滞在を認めている。しかし、バラッド「魔性の恋人」やネズビットの「約束を守った花婿」の場合と異なり、約束通り亡霊となって夫のもとを訪れた妻の主張は、第三者の介入、すなわち更なる滞在を望む娘によって阻まれ、受け容れられることはない。自らも窓を叩く音として、死にゆく母親の訴えに接していた娘は、母の死後、母への愛よりも恋人への愛を優先させてしまったことに対する自責の念から、恋人との結婚を断念する。しかし娘は、母親が理解し許してくれていることを確信している。

### 4. アミーリア・エドワース (Amelia Edwards, 1831-92)

「鉄道員の復讐」 (“No. 5 Branch Line: The Engineer,” 1866)

エドワースの作品でも、死者とのわだかまりが主題となっているが、マロック

の作品と異なり、自責の念にかられるのは女ではなく男である。親友に対し致命傷を負わせ、死へと追いやった加害者は、他者を嫉み犯した殺人の報いを受ける「カインの呪い」によって、被害者である親友の死後、償うことの出来ない自責の念に駆られ、それを相手の女への憎悪へと転嫁させている(99)。女への復讐に燃え、自分が運転する列車の脱線させることで心中を企てた男は、女および加害者を赦して死んだ親友の亡霊の出現によって救われる。ここでは男同士の絆が生死を越えて回復されている。

#### 5. ウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins, 1824-89)

「牧師の告白」 (“Miss Jéromette and the Clergyman,”1875)

この作品でも死者に対する悔悟の念が焦点化されている。松岡氏が題名で示唆した牧師の告白は、陪審で無罪判決が出た男に対する有罪性の告発である。それと同時にこの告白は、被害者の女との親密性の告白、さらにはその女の生命が将来危険に晒されるかもしれないとの予感を持ちながら、死に臨む自分の母親が息子に牧師になることを望んだその気持ちを尊重し、女を積極的にその環境から救出することを放棄した自分に対する自責の念の吐露でもある。上掲のディケンズの作品では、殺人の被害者の幽霊が、陪審に働きかけることにより判決が覆され、その結果加害者である犯人が罰せられるが、コリンズの作品の被害者である女性の幽霊は、被害者の死亡推定時刻に、牧師の前にあたかも非業の死を遂げるという自らの死の予感が的中したことを知らせるかのよう姿を現すものの何も語らない。しかも幽霊の存在は、その姿を目撃した牧師が他者に語らなければ、存在それ自体が否認の危機に晒されている。そのため牧師の告白は、牧師本人の主張のみならず、被害者の女の主張を、不完全ながらも可能にする重要な役割を果たしている。

#### 6. シェリダン・レ・ファニユ (Sheridan Le Fanu, 1814-73)

「オンジェ通りの怪」 (“An Account of Some Strange Disturbances in Aungier Street,”1853)

本短篇集中最も初期の作品であるレ・ファニユの短篇では、殺人の被害者では

なく合法的な加害者に焦点が当てられている。この作品では、長年被告人を絞首刑に処すことに加担してきた判事が首吊り自殺をし、幽霊となって新たに屋敷の居住者となった語り手の前に出現している。しかし、元判事の幽霊の没の意図は、冤罪で人を処刑させたことの報いであるかも含めて一切不明であり、幽霊の幻視体験をし、恐怖を感じた語り手もその点は不問に付している。

#### 7. エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65)

「婆やの話」 (“The Old Nurse’s Story,” 1853)

ギヤスケルの本作品では、幽霊との関係が第三者的なレ・ファニュの作品よりさらに一歩進み、登場人物と亡霊との関係が密になっている。この作品に登場するファーニバル卿の幽霊は、娘の秘密の結婚を知り、怒りに任せて雪の日に娘とその子供を外に追い出し、凍死させてしまった父親の幽霊であり、人を罰した権威者の幽霊という点では、上掲のレ・ファニュの判事の幽霊と類似している。しかしレ・ファニュの作品の幽霊は、その出現の意図が曖昧であるのに対し、ギヤスケルの作品では、幻覚体験をした者全てが、父親の幽霊は、姉娘を陥れ生き残った妹娘に罪の自覚を促すために出没していることを知っている。この事件の背景には、一人の同じ男をめぐる姉妹の確執があり、この三者の愛憎関係は、前掲したエドワースの「鉄道員の復讐」で、一人の女をめぐる三角関係が描かれていたその男女構成を、反転させたものとしても興味深い。

#### 8. メアリ・ブラッドン (Mary Braddon, 1835-1915)

「クライトン館の秘密」 (“At Chripton Abbey,” 1871)

本書の最後に配置された本作品は、これまで概観した他の7作品を総括する役割を担っているが、特に冒頭の「約束を守った花嫁」と呼応している。結婚を控えたクライトン館の当主の息子エドワードは、先祖の亡霊の警告、当家の家督相続予定者はキツネ狩り中の事故で死亡する、を無視する形でキツネ狩りに出かけ、命を落とす。エドワードが周囲の心配をよそに外出を強行した背景には、婚約者ジュリアに、自分の慈善観を批判されたことへの反発がある。そのためエドワー

ドは、バラッド「魔性の恋人」や「約束を守った花婿」の亡霊となる男たちのように、ジュリアに再会後の結婚を誓って出掛けてはいない。一方ジュリアは、自らの体面のためではなく実質的な支援を主張してエドワードの偽善的な慈善観に対抗し、「約束を守った花嫁」のメイが、恋人からの度重なる求愛を拒絶していたように、男の愛を退け、男を死に追いやるファム・ファタルになっている。しかもジュリアは、メイや「魔性の恋人」に誘惑される女と決定的に異なり、男の死後も生き延びている。ジュリアはエドワードを失った悲しみを感じつつも生き続けることで、ギヤスケルの短篇の妹娘、父親および姉母娘の幽霊の出現を自分が犯した罪に対する報いと感じるミス・ファーニバルとも異なる。そのジュリアに対し、エドワードの遺族の女たちが彼の死後、批判の目を向けていないことは、注目に値する。女の連帯は、マロックの「窓を叩く音」に登場する母娘関係、すなわち死者との和解にも見られるが、「クライトン館の秘密」では、生き残った女たちの間に存在している。

このように本短篇集に収録された幽霊物語は、男が女を誘惑する「魔性の恋人」や、女が男を誘惑するファム・ファタルを原型として用いることで、社会制度の不備に対する弱者の主張や告発を間接的に行っている。総じて幽霊／死者は、生者にとって対立すべき存在ではなく、和解すべき存在である。このことはヴィクトリア朝の幽霊観を考察する上で、一つの視点を提供している。

#### 参考文献

“The Daemon Lover.” Ed. Francis James Child. *English and Scottish Ballads*. Boston: Little Brown and Company, 1857. 319-322.

Lutz, Deborah. *The Dangerous Lover: Gothic Villains, Byronism, and the Nineteenth-Century Seduction Narrative*. Columbus: Ohio State UP, 2006.

「魔性の恋人」『全訳チャイルド・バラッド』バラッド研究会編訳 第一巻  
音羽書房鶴見書店 2005年 pp.260-261, 359

(専修大学 非常勤講師)